

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 27

関西大学考古学等資料室彙報

平成5年5月30日発行



銅戈

A Bronze Pike

目 次

古墳の盛土	2
本学蔵鉄鋏の銀象嵌について	4
平成4年度調査報告「山陰」の遺跡と博物館施設	7
ボフム大学ミュージアム—対峙する古典古代と現代	8
学芸員のための資料借用心得	10
ある博物館への憧憬	12
熊野・二木島の唐人墓	14

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35

Tel 06-388-1121 (内線3341)

古墳の盛土

西田 一彦

1. はじめに

古墳は考古学の重要な研究対象物である一方、土質工学からみても、古代人の知恵を現代技術に生かすという意味で大切な情報源の1つである。とくに、1000年以上もの長い年月を経過したこのような土構造物は、短時間の室内実験では得られない土の長期にわたる挙動に関する情報を与えるという意味で貴重なものであり、このような視点からの研究は、土質工学の一分野として発展させるべきものと考えられる。

そこで、この機会に、いくつかの古墳の盛土について、その性状を土質工学的視点から述べてみたい。

2. 今市大念寺古墳の場合

今市大念古墳は島根県出雲市大念寺境内に存在するもので、6世紀半ばから後半に築造されたものと推定されている。全長約92m、後円部径44m、前方部幅44m、高さ7m、横穴式石室をもつ三段築成の前方後円墳である。

その土質工学的特徴は、写真-1に示したように、盛土は、黒色粘土と砂の混合層、灰褐色粘土層、暗褐色粘土層、直径2～3cmの礫層が厚さ10cmに、下部では20～40cmに盛土されている。このような土層を版築と呼ぶこともあるが、その定義についても種々の見方があるので、ここでは盛土という言葉を用いる。これらの土層のうち、黒色系の土層は顕微鏡鑑定によると、



写真-1 今市大念寺古墳の盛土

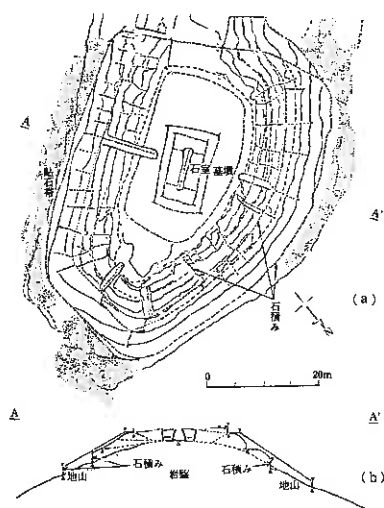
黒色ないし黒灰色の木炭片を起源とすることが明らかにされている。また、褐色系土に含まれている加水ハロイサイトが見られないことから、褐色系土に木片を混合して焼いたものと推定されている。さらに、興味深いことは、この黒色系土から多量のクロムイオンやマグネシウムイオンが抽出されていることである。このことから、盛土層は、不透水性にするため、土に木片を混合して焼き、さらに海水を用いて締め固めるという工法で意図的に改良されたことが推定された。

3. 森將軍塚古墳の場合

森將軍塚古墳は長野県更埴市森に存在するもので、4世紀後半に築造されたものと推定されている。全長約100m、後円部径45m、高さ10mの前方後円墳で堅穴式石室を持っている。この古墳は、山地尾根部の地形を利用して整形盛土されたもので図-1(a)のように長軸がやや曲っていることや、墳裾に石垣が施工されていること等の特徴を持っている。

その土質工学的特徴は、図-1(b)に示したように、全周に数段の石積が見られ、さらにそれと直交する方向にも石積みが配置されていることである。これは、厳しい地形条件の下で工事を行うための1つの対策工と見られ、仕切り、丁張り、あるいは、盛土の補強の役目をさせているものと考えられる。ここでも、また、盛土は、石英斑岩の小角礫、泥岩破碎礫および泥岩風化土の互層からなっており、礫層は、排水と補強の役割をはたしているものと考えられる。

保存復原工事の資料を得るための、盛土層から乱さない試料を採取し、乱さないものと乱してほぼ同一密度、水分量で締め固めたものに対して一軸圧縮試験を行った。その結果は、乱さない試料で、乾燥密度 1.71g/cm^3 、自然含水比14.93%、一軸圧縮強度 3.29Kgf/cm^2 、破壊ひずみ2.9%、そして締め固めた試料のそれらは、 1.62g/cm^3 、14.69%、 1.63Kgf/cm^2 、1.72となった。後者を墳丘盛土直後のものと仮定すると前者の強度が大きいのは盛土後の時間効果による



図一 森將軍塚古墳の後円部石積み

ものと推定される。

4. 五色塚古墳の場合

五色塚古墳は、神戸市垂水区五色山にある前方後円墳で4世紀末から5世紀始めにかけて築造されたとされている。全長194m、後円部径125m、前方部幅81m、三段築成で高さ18mの規模を持っている。

土質工学的特徴は、墳丘盛土は、図-2のように水平な地山の上に焼土や灰状土が10cm程度突き固められ、周辺部を高く盛り、中心部に向かって低くなるように盛られている。用土は地山由来と考えられる砂質土に砂利を混合したものとなっている。また、前方部と後円部の接続部分に地山に切り込んで砂利、礫が堀状に詰められており、これが墳裾まで追跡できることから、これは、地山と盛土の間の排水の目的で設けられたものと推定される。

5. 峯ヶ塚古墳の場合

峯ヶ塚古墳は、大阪府羽曳野市にある墳丘長96m、後円部径56m、前方部幅74.4m、後円部の高さ8mの前方後円墳である。

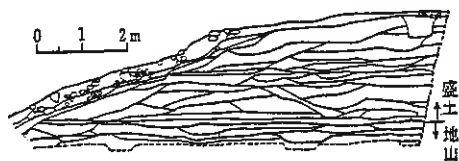
その土質工学的特徴としては、盛土が写真2に示すように厚さ数センチの粘性土と砂質土の細かな互層よりなることである。この盛土に対して標準貫入試験を行ったところ、N値は、平均31.3にもなり、過去実測されたうちでは最大の値を示すことが明らかとなった。またこの盛土は、普通の地盤に比べ、粘土分が多い割に大き

な密度を示すことから、その原因が上述の盛土の構造に依存することが推定される。

6. 土質工学的考察

砂質土と粘性土を互層に盛土することは、粘性土と砂質土の特性を巧みに生かした優れた工法であると考えられる。すなわち、粘性土は粘着力をもつが排水しにくいこと、砂質土は粘着性が乏しいが摩擦力和排水性が大きく、両者を薄く重ねることで、再者の欠点が相殺されるとともに粘性土は圧密排水され、強固なものとなる。一方、降雨は粘性土で遮断され、砂質土を通じて外部に排水されるので盛土の深部まで浸入せず盛土内部は常に低い水分を保持しうることになる。さらに、施工においても縞目があることは、1つの目印として便利に利用されるものと推定される。

このような細かな盛土構造は手間と時間のかかる人力作業で始めて可能なことであり、最近の施工機械ではむしろ困難なことかも知れない。しかし、盛土の安定には非常に有効な工法であると考えられる。



図一 五色塚古墳の盛土断面

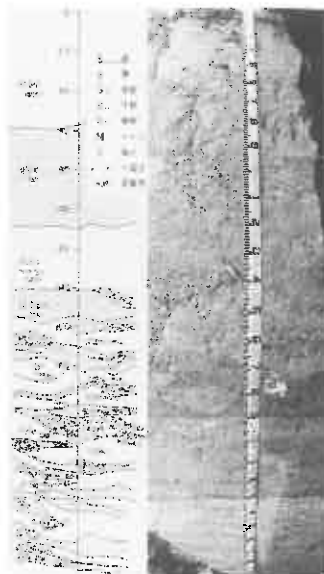


写真-2 峯ヶ塚古墳の盛土

本学蔵鉄鋏の銀象嵌について

網 干 善 教

1

関西大学考古学資料室の蔵品に一挺の鉄製鋏^①がある。この資料について『本山考古室要録』には「三二九、鉄製鋏 一個 朝鮮慶尚北道慶州古墳、全長四寸四分 折曲式」とある。収蔵の経緯は不明であるが、慶州の古墳より出土したものとして本山考古室資料になり、その後関西大学に移されたものの1点である。

関西大学では平成4年度の資料保存処置としてこの鉄鋏を奈良県立橿原考古学研究所資料室保存科学研究室の今津節生室長に依頼することにした。その結果、研究部長の泉森蛟氏より鉄製鋏に銀象嵌が施されているとの連絡をうけ、関西大学考古学等資料室主任の角田芳昭氏と橿原考古学研究所に赴き実見した。今回、保存処置が完了したのを機会にこの資料について紹介したい。

2

本鉄鋏は全長11.0cm、刃渡り5.5cm後端のバネの部分が8字形になった形式である。ただ、この鋏は現在も使用されているバネの部分がU字形になった日本鋏の構造ではなく、バネの部分がさらに折り曲げられて円形状をなした形式で握部とバネ部分に分れている構造といえよう。

つぎに本資料は片方の刃の部分は完形であるが、他方は先端が欠損している。そこで説明上、完全な刃部の方をA面とし、欠損のある方をB面とする。

なお、保存処理前は全面に錆着があって象嵌を施したような痕跡はみられなかった。そこで保存処理の前にレントゲン撮影が行われ、銀象嵌のあることがわかり、最終的には研ぎ出しが行われた。

検出した銀象嵌の文様は刃部のA、B両面に施されている。文様は連続する細様の唐草文である。

A面をみると、唐草文は刃部の基部の方から先端の方向にかけて展開する。B面よりも残存状態は良くないが、B面を参考にして復原する

と、まず刃に平行して直線の象嵌がある。基部に近い端は外側に折曲するであろう。残存する文様は2区劃目からである。すなわち、最初の唐草文が左にのびて、二茎に分れ、渦巻く。さらに左にのびた茎は外に向いて左から右に巻き、渦巻状になった先端が二つに分れる。

これより刃先の方は内に向って巻いた茎があり、先端の方は波形の省略された文様となる。

反対にしたB面は基部の方から先端に向かって展開する文様が施されている。最初は外側から内側に渦巻く茎があり、その先端が二つに分岐する。一方途中で分れた象嵌は波状となって先端方向に曲り、再び二茎に分岐する。

一方は先と同様渦巻き状になり、その先端は二つに分岐して終る。途中で分岐した方はさらに連続し、二つに分岐する。それより先端側はA面と同様省略された曲線の文様となる。

以上が銀象嵌唐草文の概要である。



本学、蔵銀象嵌唐草文のある鉄鋏

そこで鉄鋏について紹介しておきたい。

本来鋏とは片刃をもつ2枚の相対する刃部を内側で接し合わせて切断するのに用いる道具であるが、『図解日本考古学辞典』(林巳奈夫)や『世界考古学辞典』(渡辺貞幸)の記述によるとすでに紀元前一千年紀の後半に現在の鋏の原形が知られるという。そしてヘレニズム時代のブリエネ出土のものが最古で、後端がU字形になった形式が古いとされる。

鋏の構造には大別して後端のバネの部分のU字形になったもの、円形若しくは卵形のもの、そして8字形のものの3種類が考えられよう。

他方、通常西洋鋏と称されるものは2枚の刃が、中央の支点によって刃の部分と握りの部分に構成されるX字形がある。

中国では後端がバネになった形式のものが、漢代(前漢末あるいは後漢という説がある)から宋代までの副葬品に多くみられるといわれる。これらのバネは大部分が8字形であり、U字形のものは六朝代のものが1点あるのみとされる。(なお、西洋鋏の形式は唐代の例が最も古いとされる)

さて、本資料が目録の如く朝鮮慶州出土のものとする、同じ慶州附近で鉄鋏の出土が知られている。慶尚南道梁山郡梁山面北亭里に所在の梁山夫婦塚である。古墳は1920年、当時の朝鮮総督府によって発掘調査が行われた。東より

西に降る尾根上の標高約75mの位置に築造された円墳で、外径約27m、高さ約5m、京釜高速道路から見上げても一際目立った墳丘である。

埋葬主体部は東西5.5m、南北2.3m、高さ2.6mの横穴式石室で、北側に金銅冠や鍔帯金具などを着装した男性が葬られ、北側には白樺皮製の冠帽などを着装した女性の遺体が追葬されており、その他入口側には3体の合葬があった。また石室内東側には多量の土器や金属製容器、馬具などの副葬品があった。その後1990年に東亜大学校沈奉謹教授らによって再調査が行われた。

この古墳での鉄鋏は女性を追葬した北側の棺の南端にあった。鋏の構造は円形のバネ部と2枚の刃部で、刃は内側に附されている。完形品ではないが構造は判明する。但し象嵌はない。

本資料について報告書には「鋏一挺、鉄製の握り鋏で、長さ四寸七分、握りの部は円く曲げて鉄の弾力を利用し、先端は刃を両方より向ひ合せにせるもので、現今行われている握り鋏に類似するものである。」と記述している。

日本での鉄鋏の出土例は少なく、しかも銀象嵌を施したものはない。ところで参考のために古墳時代の類例を挙げておく。

戦前には群馬県高崎市乗附古墳や熊本県才園古墳出土のものが知られていた。

乗附古墳(旧群馬郡片岡村乗附所在)は高崎市街地から鳥川をはさんだ西南側の丘陵地帯に



梁山夫婦塚石室内鉄鋏出土位置図(報告書による)

ある6世紀から7世紀にかけての横穴式石室の群集墳の地帯である。伝高崎市乗附出土の鉄鋏は現在東京国立博物館の所蔵となっている。^⑥同館目録によると、「発見年月日 未詳。受理次第 1912（明治45）年6月24日、亀田一怒より購入」の遺物であり、他に刀子、鉄鏃、鞍1対が挙げられている。このうち鉄鋏については「刃部大半を欠損。現在長14、刃身幅1.6、環部径6.8、同厚0.6。刃部僅かに遺存。柄部の遺存状態良好。」とある。掲載された写真では刃部が細く、華奢なもののように見受けられる。

次に熊本県才園古墳は球磨郡免田町才園にある。（円墳、横穴式石室）昭和13年、公会堂建設にともなって発掘された4基のうちの1基の古墳で石室内から画文帯四獣四獣鏡 碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス製丸玉、金環、直刀、鉄鏃、鉄斧、馬具類の多量の副葬品が出土した。そのなかに鉄鋏がある。古墳は5世紀末から6世紀初頭の築造と考えられている。

近時、奈良県下では桜井市穴師1067-1に所在の珠城山1号墳（前方後円墳、片袖式横穴式石室）から出土している。これについて報告書では「現在使用の西洋鋏と日本鋏の折衷式といえるものである。」とし「刃部から続くバネ部が現在の日本鋏のように刃のある方に曲げてあるのではなく、背の方に曲げて刃と刃とを対応させているもので、刃部とバネ部の接するところよりむしろ刃部の方を圧して使用する刃渡18cmバネ部の径6.5cmのものである。」とする。

もう1例は奈良県橿原市川西町高塚に所在する新沢千塚第272号墳（前方後円墳と推定）の第2主体部（組合形木棺直葬）から出土した1点がある。報告書では「全長17.5cm、一本の鉄棒を折り曲げて、環状の握りと、刃部を作りだしている。握りと刃部の交点には、要めの鉾が打ち込まれている。」とする。握りの部分の断面は4.5mmの方形である。

以上の2資料は構造的には基本的に類似する。すなわち刃部は外向の同一方向につくられ、それを円形に曲げてバネ部をつくり刃を対応させ、これによって鋏としての機能をもたせるようになっている。ただ異なる点は珠城山1号墳のものはバネ部の断面は円形であるのに対して、新沢千塚272号墳のものは方形であり、握部と刃部との交点に要の鉾がある。

ここに紹介する本学蔵の鉄鋏も機能的には同じである。ただ、本資料は刃部と握部とバネ部が明確につくり分けられているということである。珠城山1号墳や新沢千塚272号墳のものは刃部を握持するようになっているが本学のものは現在も用いるU字形の日本鋏と同様握持する部分が刃部に接続してつくられている。そしてその握部の後端にバネ部がつくという構造であって先に挙げた資料より合理的、機能的に製作されているものといえよう。

5

次に本資料の特徴は、わが国ではその出土例が数例しかないバネ式の鉄鋏と管見ではあるが慶州出土に1例があるというほかA、B両面とも外側に唐草文の銀象嵌の文様が施されているということである。古墳時代の銀象嵌は刀剣や鑑鏡等においてしばしばみられるものであるが、このように鉄鋏の刃部に施された例はない。勿論その目的は装飾的意味であろうが、なかなか気のきいた表現であると思う。その文様がまた銀象嵌の手法で施した唐草文であるとするところに製作者の風流があり、優雅で格調の高いつくりであると考ええる。

今回の確認は希有のものであるのでここに報告する。

注① 末永雅雄編『富民協会農業博物館 本山考古室要録』昭和10年

② 水野精一・小林行雄編『図解日本考古学辞典』昭和34年

③ 平凡社編『世界考古学辞典』昭和54年

④ 朝鮮総督府『梁山夫婦塚と其遺物』古蹟調査特別報告第五冊 昭和2年

⑤ 東亜大学校博物館編『梁山金烏塚・夫婦塚』古蹟調査報告第十九冊 1991年

⑥ 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇（関東II）』昭和58年

⑦ 乙益重隆『肥後上代文化史』昭和29年

⑧ 奈良県教育委員会『珠城山古墳』昭和31年

⑨ 奈良県立橿原考古学研究所編『新沢千塚古墳』奈良県名勝天然記念物調査報告第39冊 昭和56年

平成4年度調査報告 山陰地方の遺跡及び博物館施設

角 田 芳 昭

考古学等資料室所蔵の諸資料について毎年その出土地の確認、写真撮影、資料収集などの調査を実施し、その結果を本誌及び紀要等へ報告してきた。平成4年度は山陰地方の遺跡及び博物館施設を調査見学したので、ここに報告しておきたい。

本学所蔵資料出土地としては鳥取県東泊郡由良村（旧地名・以下同じ）、大谷野、太一垣、南谷村、西泊郡高麗村、島根県能義郡宇賀庄、簸川郡檜山村等出土の石斧、石錘、石鏃、石棒等と土器である。文学部綱干善教教授（資料室管理運営委員長）が同行指導して下さった。

9月25日早朝J R京都駅を出発し12時55分鳥取駅に着く。先ず「鳥取県立博物館」を見学する。「県民の教育、学術および文化の発展に寄与するため」の施設として久松山下鳥取城跡内に設立され、昭和47年10月に開館、自然系、人文系、美術系の3部門を展示する総合博物館である。敷地14,228m²、床延面積9,669m²で地下1階、地上3階の建物で、県民期待の施設で充実した展示がなされていた。地学生物、歴史民俗、美術の各展示室に郷土との関連した展示があり、わかりやすく、また音声を使ったビデオなど解説されており、調査研究の成果なども盛んで、当地域における中心的施設であると感じた。見学を終えたところで長岡充展氏（鳥取県埋蔵文化財センター技師）に出迎えられ、次なる見学地「渡辺美術館」（鳥取市覚寺堤下1-55-1）へ着く。当館は医師渡辺元氏が数10年に亘って収集された古美術品を展示したもので、元のポーリング場を展示場にされており、膨大な資料であ

るが、玉石混淆というところで、資料を精選され学術的に整理し、解説されることを望みたい。今後の発展を期待したい。その後岩美郡国府町の諸遺跡を見学した。「大伴家持の歌碑」「岡益の石堂」「因幡国庁跡」同「正殿跡・南門跡」等である。岡益の石堂は安徳天皇御陵参考地に指定され宮内庁管理となっているが、6 m 米四方の基壇の上に厚さ40センチ前後の壁石でかこった石室が造られ、石室の中央に柱基があり、その上にエンタシス（胴張り）のある円柱が建っている。この上にマス型をした中台が2つのっており、7世紀頃の建立と考えられている。当地方での珍しい遺跡でこの地方を訪問された折には一見してもらいたいものである。この南方1.5km のところに「梶山古墳」が存在している。この古墳は魚の彩色壁画が発見され著名となったが、近年の調査で八角墳ではないかとの説も出され、新たな話題を呼んでいる。夕刻「ニュー鳥取ホテル」到着、旅装を解いた。

第2日目はご案内を依頼しておいた島根県教育庁文化課兼埋蔵文化財センター主事鳥谷芳雄氏のお迎えを受け、長岡充展氏とご父君健二氏も同行案内下さることとなった。梶山古墳見学後、気高町「寺内廃寺」を見学する。ここは以前関西大学考古学研究室において発掘調査し瓦など多量の出土遺物があつたので、なつかしく見学した。現在はうめ戻されている。ひき続き車にて除々に西へ移動し「羽合町歴史民俗資料館」を見学する。国指定重要文化財「長瀬高浜遺跡」出土の土器、石器、小銅鐸などが展示されている。また西へと移り本学資料出土地（石斧・石棒等）の「太一垣」へ着く。なだらかな丘陵で古代人の住居とするには誠に暮し良い場所である。周辺の田の畦道を徘徊し遺物を捜したが発見できなかった。国道の片側に「太一垣」の表識が淋しく建っていた。午後より倉吉市へ入りまず「倉吉市博物館」を見学させていただいた。美術収蔵庫とその空調について主任学芸員前田明範氏のご説明を受け、空調の重要性を改めて識った。また根鈴輝雄、眞田眞幸学芸員のご案内で常設展示と特別展示「瓦経展」を見学した。全国の多数の瓦経が展示され、その形

(16ページに続く)



太一垣出土 石斧

ボフム大学ミュージアム

——対峙する古典古代と現代——

物 部 晃 二

ドイツのルール地方といえば、日本の小学生でも知っている、世界有数の工業地帯である。その鉄と火と煙というイメージにはすぐに結びつかない、広い空の下、牧歌的な丘陵の地に、ボフム大学 (Die Ruhr-Universität Bochum) の学棟が林立している。縦横、規則正しく配置され、方形で、同じ高さと大きさの、巨大なコンクリート建築群である。大学のミュージアム (Die RUB-Kunstsammlungen) は、この建築群を二分してひらけるフォーラムの一方に、円形の音楽ホールと向き合うかたちで建てられている。

十年近く前、この地での滞在を始めたばかりのある日、キャンパスを緊張気味にうろついていると、予期することなく、〈動く彫刻〉(1970、Y. Agam 作) が、黙々と姿を変えているのに出会った。そこが、ミュージアムの前庭であることに、その時しばらくの間、気がつかなかった。右手には、錆色を呈した鉄の作品 (1972/73-5、J. Reineking 作) が、さりげなく床に置かれていた。大きなガラス越しに中を見透すと、〈ラオコーン〉の復元群像が見え、その傍らで、円形に敷かれた砂の上を、同心円の波紋を描いて、竿のようなものが熱心に回転していた (1968年、G. Uecker 作)。眺めていると、遙かな過去

から、ずっとそのように回転しているように思われた。そのあたりに佇んでいると、未だ初見の挨拶を済ませていないイムダール教授 (Prof. Dr. Max Imdahl) の面影と人柄に、はからずも前もって接している気持ちが出て、少し心が安らいでくるのを感じたのを、今でも思い起こすことがある。

このイムダール先生に率いられて、バロックの建築家、Fischer von Erlach をテーマにウィーンへ、現代美術をテーマにオランダの Kröller-Müller 美術館へ、と方々の、美術史及び藝術理論の実地演習に同行したが、新学期の最初の時間は、大学のこのミュージアムで行われた。

ここには、古代ギリシア・ローマの作品を主として、西欧文明の起源に溯る作品と、今世紀の20年代から今日に至る現代藝術——ほとんどすべて非具象の作品で、蒐集者の確かな評価の眼が感じられる——が、展示されている。時代的にかけ離れた、ヨーロッパ美術の二つの極の作品群が、緊張をはらんで対峙する、ユニークな美術・博物館である。

われわれは、たとえば、Jan J. Schoonhoven の手になる白い格子状の幾何学的レリーフ (1974) や、N. Kricke の球状の空間造形 (1978) の前に立ったあとで、ミケーネの壺の単純で流麗な線を眺め、ギリシアの、幾何学的な模様の壺や黒絵式の壺が並ぶ部屋から部屋をめぐり、肖像彫刻の陳列室で、アリストテレスやアグリッパの大理石像に対面することになるのである。さらに、現代に立ち戻り、J. Albers の方形からなる抽象絵画や、A. Giacometti のブロンズ男子像の前にもあろう。そして、隔たる時代を往還して、その間をさまざまな思いと問いで埋めることもできるのである。

「皆さんは、こんなに新しい大学に、このようなミュージアムが在ることに、きっと驚かれることでしょう。ボフムは、これで、他の大学と肩をならべて、自分たちのミュージアムを持つことができたのです」と、列品解説のパンフ



写真 (A)

『Dierichs コレクションの解説図録、1979』のカバー表紙。左：アリストテレス像 (アレクサンダー大王がつくらせ、師に捧げた頭像の、ローマ帝政時代のコピーのひとつ) 右：1969、R. Serra の作品。



写真 (B)

ミュージアム内部から前庭をのぞむ。手前は、1974、G. Spagnulo の作品。ガラス越しに、1970、Y. Agam の作品が見える。

レットの冒頭に書かれている。続けて述べられているように、あらかじめ熟慮された構想のもとに、今みるような「他に類をみない」新鮮なコンセプトのミュージアムが出来たのではない。60年代半ばに創立されたこの大学に、当然のように美術・博物館設立の計画が持ちあがると、ボフムにゆかりの多くの人々の蒐集品がこの大学に寄贈されたのである。

こうして、1975年開館したミュージアムの中核となったのは、いくつかのコレクションから、まとまったかたちで寄せられた、次のような作品群である。(1) 古典古代を主とする、壺など、601点 (2) 古代ランプ、408点 (3) 古代コイン、2828点 (4) コレクターから寄せられたものと、美術史学科蒐集による現代の作品 (5) <ラオコーン> 等、考古学科蒐集による復元ブロンズ像

その後、このミュージアムのコンセプトを明



写真 (C)

<ラオコーン>復元群像と、1974、Jan J. Schoonhoven の作品。

瞭に印象づけることになった、古典古代の貴重な大理石肖像彫刻、8点と、N. Carrino、T. Lenk、G. Spagnulo、G. Rickey、F. Stella 等、現代の立体作品とを合わせもつ、Dierichs 氏のコレクションが寄贈されると、1981年、展示室が拡張されて、今日に至っている。

<古典古代と現代の対峙>というコンセプトからなる新たなミュージアムは、だから、はからずして出来あがったのである。しかし、古典古代考古学の分野で名高い、ボフム大学の考古学科と、最先端の現代美術に対しても、比類のない理解と確乎とした知見を示されたイムダール教授の存在のことを考えると、それは単なる偶然によるとは思われないのだ。むしろ、このユニークな空間にいと、はじめからルール of ボフムにこそふさわしい空間として、ここに立ち現われたかのように思えてくる。この辺りは、今も、大学の植物園とともに、産業都市ボフムの勤勉な市民たちが、学問と藝術にそれぞれの夢を託して、集い来たり、誇らかに散策する場所であることだろう。

たしかに、「大学には博物館がある。もちろん、西欧の話である。わが国の大学には、そういうものは、ほとんどない。不急不要なものと思なされているからであろう。……博物館に代表される興味のありよう、それが大切なのである。そこには不思議なものが、多数存在している。」(養老孟司氏、日本経済新聞、平成4年6月23日付夕刊、より)



写真 (D)

今は亡き、イムダール教授 (中央) の演習風景 (Mönchengladbach 美術館にて、1983年7月5日、筆者撮影)。

学芸員のための資料借用心得

近年博物館、美術館施設において特別展を開催されることが多くなった。慶ばしい限りである。それにともない資料の貸借も頻繁に行われることになる。本学へも借用に来学されることが多くその立会いの機会も多くなったので、ここに学芸員の借用心得についての感想を思いついたまま記してみたい。

学芸員として資料の借用は重要な仕事であり、館を代表しているのであるから緊張せざるを得ない。もし不手際があったり、約束の日時を間違えたりした場合取り返しのつかないことになりかねない。その施設が初対面の場合はなおさらである。本人の信用は勿論、館の信用まで失墜させてしまうからだ。

まず資料の借用については事前に特別展開催についての計画書とともに「借用願」を館宛に出し、その結果をもとに交渉に当たる。返信用封筒あるいは相当分の切手を同封することも常識である。前もって先方の意向を聞き、自分の都合とで調整し、約束をとりつける。当日は、約束の時間より少し早めに到着したい。また初対面の場合は服装をきちんとしていきたい。道路事情などで大幅に到着が遅れる場合は、先方へ連絡しておく。

1. 運搬業者の選定・打合せ

近年資料の輸送も美術梱包専用車両の利用が普及しており、この車両を所有している運送業者へ依頼すると良い。その従事する担当者も美術品の輸送・梱包をはじめとする資料の取扱のエキスパートであり、講習を受けている人々である。輸送計画、借用日時等打合せを行い決定する。

2. 借用書の持参

最も基本となる書類であり「借用書」あるいは「預り書」または「預証書」ともいう。これに借用資料名、出土地（あるいは製作者）、点数、借用期間等を記入し、借用先へ差し出す。そして後日資料を返還した場合に必ず受取り持ち帰る。

3. 資料の観察

借用資料について充分観察しメモなどを作成しておくこと。取扱う前にまず、時計・指輪・

腕輪などをはずし、布地の手袋を着用し、そして両手で必ず持ち移動させる。また携帯用豆ランプなどで観察し、完全な資料か、破損している箇所はどこか、傷の状態は、剝落はないかなどを「借用資料点検書」（写真張付）に記入し、立会人に確認してもらい借用書の控えとしておきたい。書画の「極書」ではたとえ小さな附属品の場合でも確実に一つひとついねいに書きしるしておくことも必要である。この確認が終わったら梱包作業に入る。

4. 梱包作業

梱包については特に注意深く見守ることが大切である。専門の業者の梱包作業について基本手順で行っているか、材料の不足はないか、特に取扱を丁寧にしているか、箱詰めにして衝撃を受けても大丈夫なようにしているかなどについて注意し、間違いがあれば指摘し直してやりたい。あくまで学芸員が主であり業者は従である。最後に、明記したリストを梱包した箱へ添付し個数を確認する。

5. 展示室の見学

梱包が完全に終了したら、時間の許す範囲で展示室や実習室、図書室、可能ならば収蔵庫などを見学させていただき収蔵方法、整理状態、換気、除湿等の専門知識を得るとともに、次の借用の参考にしたいものである。

6. 借用資料に関連した論文、写真などの寄贈申出

借用資料に関連した論文、紹介記事・写真、目録文献等について質問し、コピーや資料・文献などを恵贈してもらおうよう依頼してみることも必要である。目録解説の参考となる。

7. 図録・紀要・年報・論文集を献呈する。

資料借用の折、自館の印刷物を寄贈することは常識であろう。館のPRにもなり、学問的水準も評価され信頼度も増すので可能な限り持参したいものだ。また、借用資料に関連したポスター・チラシ・招待券が印刷できていた場合は持参したい。未定の場合は、印刷が出来上がった段階で直ちに見学いただきたい旨の招待状を送ることが望ましい。

8. 資料返還心得

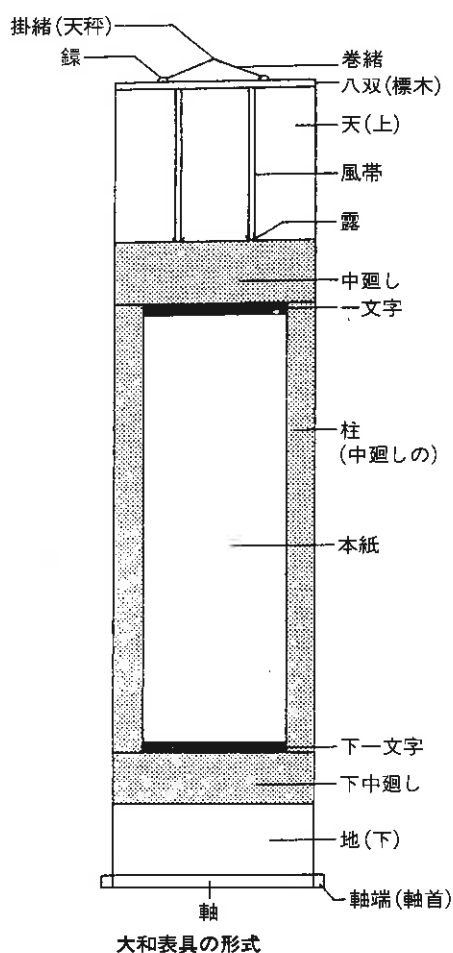
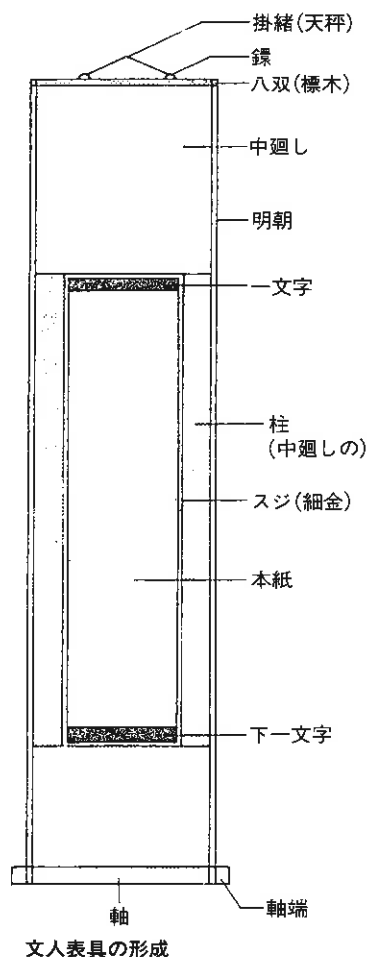
借用資料の返還期間が近づき、返還日が決定したら早めに連絡し、返還日について打合せを行う。到着後返却資料を梱包した逆の順序で解放し、点検していただき、点数等確認の上「借用証」あるいは「預り証」を返していただく。その折特別展の図録と若干のお礼（手みやげやビール券等が多い）をしたい。借用したお礼として予算の範囲において届けたい。あるいは都合により借用するときに持参しても良い。

最後に学芸員として日頃自覚して業務を遂行する「心得10則」を記しておきたい。（富士川 金二 著『博物館学』より）

- ① 館の使命と目的をよく理解し自覚して常に業務に邁進しているか。
- ② 事業の発展と奉仕のために常に意を用いているか。

- ③ 事業を担当するに必要な教養と専門知識と情熱とを常にもっているか。
- ④ 専門的業務について常に調査・研究しているか。
- ⑤ 自己評価について常に留意しているか。
- ⑥ 専門職としての社会的地位と指導者としての立場を常に自覚しているか。
- ⑦ 教育的利用法の進歩に常に留意しているか。
- ⑧ 関連する社会教育施設の調査研究とその連携に常に留意しているか。
- ⑨ 学校教育との関連と協働に常に留意しているか。
- ⑩ 博物館施設の現状と将来について常に留意し、講演や研究論文等を発表しているか。

〔角 田 芳 昭〕



掛軸の表装形式

ある博物館への憧憬

伴 義 孝

関心事に引かれて、一度は、訪れてみたいという所が誰にもあろう。私にとって、そこは、ネアンデルという溪谷（タール）地であった。ドイツのデュッセルドルフの近郊、そこに、こぢんまりとした博物館がある。

はじめて訪れたのは1988年であった。ずっと以前からのある憧憬があつて、そしてその頃執筆中であった『身体運動の人間学』（晃洋書房）にネアンデルタール人を取り上げていた関係で、どうしても見ておかなければならないと考えたからである。

1856年、その溪谷の洞窟で、最後の化石人類の人骨が偶然に発見された。発見地に由来して、ネアンデルタール人と命名されることになり、これを契機にして、人類学論争に一層の拍車がかかることになる。

ネアンデルタール人は、いまから10万年ほど前に地球上で生活しはじめ、3万5千年ほど前に、現生人類の始祖クロマニヨン人にとってかわられて、絶滅した旧人である。その出土した人骨や生活用具とした石器類などから類推して、そう位置づけられている。生活圏も広範で、現ヨーロッパ・アフリカ・アジアの各地に点在したことが判明している。

私の専門は人類学や考古学ではない。単なる一体育家が、何故に、このネアンデルタール人

に興味を覚えることになったのか。それは、寒冷地にも生在圏を拡大するという高度な生活適応技術を具備し、死者の弔いに花を献じるといった精練された精神文化を享受していたとされる彼らが何故に絶滅してしまったのか、という疑問から始まった。

もちろん門外漢の私だから、その疑問を、専門分野の知見にならって、学問的に解明しようなどとの大それた野心は持ち合わさない。切掛はこうだった。

日本で「運動不足症」問題が浮上しだしたのは1970年頃からであって、やがて、この文明病は子どもの身体をも蝕み始める。1980年代になると、本来あろうはずがない、子どもの糖尿病が観察されるようになった。身体運動と食生活のアンバランスが正犯だった。

この頃、私の研究課題は、その、身体運動と人間生活の係に傾いていた。しかも直立2足性という、人間存在の、根源的な身体運動様式を問い始めることになったのである。

そんな矢先、児童文学としても紹介された、ある新鮮な小説に出会った。3部作からなる『始原への旅だち』（J・アウル・中村妙子、評論社）という大河小説だった。この小説は、大地震に遭遇したクロマニヨン人の少女「エイラ」が、ネアンデルタール人の一族に助けられて、育てられることから始まる。

事実、考古学の教えるところ、現生人類の祖先クロマニヨン人は、出現した3万数千年前からおよそ3千年間は旧人ネアンデルタール人と共存しつつ次第に交代していった。

その人類進化史上の交代劇を縦軸にして、ネアンデルタール人の一族と共生しながら自立していく女性「エイラ」の葛藤を横軸にして、小説は展開していく。

作者アウルが小説技法として、際立てて、その両者を特徴づけたのは、狩りのための石投げ技術と水泳の抜き手技術において、ネアンデルタール人の一族に比較して、抜群の能力を発揮するエイラの姿であった。つまり、身体運動の



写真① ネアンデルタール博物館

問題を設定して、あたかも、両者の交代劇にその能力の差が決定的要因になったことを、手法として、匂わしたのである。

人類進化上、直立2足歩行・走行は、特有の姿勢保持能力と、バランス能力と、関節の自由度とをもたらし。石投げにも抜き手にも、その、関節の自由度がモノを言う。関節を十分に稼働させて正確な身体運動を行うためには、姿勢保持能力とバランス能力がしっかりしていかなくてはならない。

身体運動に労働のほとんどが委ねられていた時代、その能力の差異が大きければどうなるか。自明である。こうしてネアンデルタール人は、狩り場から追われたのではないか。

デュッセルドルフは、ルール工業地帯のビジネス・センターで、ドイツの繁栄を支える心臓部だと言われている。日本の商社も数多い。そこから電車でわずか20数分のところに、ネアンデルタール駅がある。線路は溪谷の小高い丘の上を走る。駅も丘の上にある。

1988年の晩夏のある日、この駅に降り立ったのは、たったの5人だった。一組の老夫婦と、一組の女子学生2名と、それに私だった。5名は、何も存在しない周辺を見渡して、まず驚いた。無人駅とも思える所に着いて、これは辺鄙な所にやって来てしまったとの顔色が互いに読み取れた、そのことが印象深い。

その丘を下って、20分も歩けば、「ネアンデルタール博物館」に辿り着く。道すがら、「鹿に注意」の標識が、やたらと、目に入る。一帯の溪谷は自然公園として、あるがままに、保存されている。都会の騒音は一つも存在しない。その辺りを散策さえすれば、ネアンデルタール人の気分も満喫できる。

画期的な歴史上の発見を伝えてくれる、この



写真② 1856年発見の「人骨」

博物館は、平屋のお粗末なものであるが、ドイツ人気質を髣髴とさせて、それはそれで納得もできる。日本なら、さしずめ、大金を投じて過剰に作りあげたかもしれない。展示物も、決して、数多くはない。しかし、模型ディスプレイをじっくり眺めながら、思索に耽る静かな時間が約束されている。そして、この貴重な化石人骨は、訪れる人々をして、現代人の生き方のなんたるかを考えさせてくれる。辺りの溪谷を散策すれば、なおさらのことに、そうなる。

初期ネアンデルタール人はともかく、イラクのシャニダール洞窟で発見されたネアンデルタール人の肩甲骨及びその他の骨格には、顔と頭を除けば、現代人のそれと比較してさほどの相違はないことが判っている。

さすれば、上記の小説仕立ての状況設定から私が勝手に推論した、関節の自由度の問題から派生する、仮説は無効になる。では、何故に、彼らは跡絶えてしまったのか。ある仮説では、顔と頭の骨組みの相違を比べて、言葉を発するために必要な音域に限度があって、それが決定的要因だったとも言う。

しかし、それまでに絶滅してしまった人類の起源を辿ると、前記の身体運動仮説は有効であると証明されている。門外漢の私にも、このように、ネアンデルタール博物館は夢多く語りかけてくれる。爾来、機会があれば訪ねて周辺の溪谷を歩くことにしている。



写真③ 複元模型

熊野・二木島の唐人墓

松 浦 章

『角川日本地名大辞典 24 三重県』（角川書店、1983年6月）熊野市、二木島（にぎしま）町の項目に、

二木島は古来陸路・海路の要所であったので、二木島の一里塚（県史跡）・クリシタン灯籠・唐人塚などが残り、鯨の供養碑（県民俗文化財）もある。（1205頁）とある。特に「唐人塚」に引かれ二木島を尋ねた。二木島は北は尾鷲市と接する漁港である。JR紀勢線の二木島駅で下車して徒歩数分のところに唐人塚があった。同地には熊野市の史跡指定の標識が立てられていた（写真① 熊野市指定文化財）。

熊野市指定文化財

史跡 陳雲漳の墓

陳雲漳は清国の臣、商船得泰号の乗員として、文政八年（一九二五）末、通商のため長崎への航行中、暴風雨で遠州吉田村に漂着、翌三月上旬幕命により長崎へ

護送の途中下り潮強きため、二木島浦に寄港、滞在中、陳氏は病のため死亡、同浦に埋葬された。出帆にさいし碑文と費用を預り、墓石建つや、これに寄せる浦人の崇敬は、恰もわが国の神佛に対するがごとく、度重なる、戦争中も、この墓前には香華のたえまがなく、美しい国際美談と云える。

指定 昭和四十四年七月十七日
熊野市教育委員会

唐人塚と呼称されていたのは、文政八年の西八番船に番立された中国の対日貿易船であった得泰船の重組員の陳雲漳の墓であった。

碑文の形状は図1のようなものである。道光丙戌年は同六年、文政九年に当る。

文政九年（1826）正月に静岡県の手原郡下吉田村住吉、大井川河口左岸に当る地に、中国から長崎に向かうはずであった貿易船得泰船が漂



写真① 熊野市指定文化財



写真② 陳雲漳の墓



写真③ 二木島湾

着した。同地での入港が困難のため曳航されて清水港に入港した。その後、長崎への送還されることになり、その途中の熊野・二木島において陳雲漳が没したのであった。得泰船の記録によれば、文政九年三月二七日にその時の様子が記されている。田中謙二氏の訳によれば、得泰船の財副劉聖孚が「本船の目侶陳雲漳儀、久しく病床にありましたが、薬石效なく、ただいま寅の刻（午前三時一五時）に身まかりました。注文として棺ならびに用品一切の給付をお願いいたしたく、別紙書きつけを高覧に供します。さらに、この浦の古寺の裏に埋葬いたしたく、かつ上陸して葬送りすべき唐人二名も、別に各簿を用意して申請つかまつります。」と述べている。そして葬られる寺は、護送の世話役として同乗している野田笛浦が「二木が浦、海福山最明寺と申し、禪宗です」と答えているように、

二木島町の曹洞宗最明寺に葬られた（田中謙二氏、松浦章編著『文政九年遠州漂着得泰船資料一江戸時代漂着唐船資料二』関西大学出版部、1986年3月、468～469頁）。

陳雲漳の墓がある地は二木島町小向、向月庵境内である（『熊野市文化財』熊野市教育委員会、1990年3月、31頁）。海岸に沿って走る国道311号の横にある。

陳雲漳の墓石には図1のような文面があるが、それは得泰船の記録にも見え、原案は得泰船の財副朱柳橋が書いたものに、野田笛浦が「佳域」を加えたもので、現在の碑と同じである。墓には陳雲漳の墓誌銘は見えず、先に紹介した『今世名家文鈔』巻八に野田笛浦が記したものが知られる（『文政九年遠州漂着得泰船資料』350頁）。墓誌銘によると「雲漳」は号であり、その系譜は次の図2のようになる。

二木島町は人口八百余人の農漁村地域で、二木島湾は南側の太平洋から見て西に深く湾があるため、JR二木島駅や、陳雲漳の墓がある地から直接に太平洋を眺めることができない。そのため湾内は穏やかで養殖筏が幾つも見られた（写真③ 二木島湾）。異国の地で没した陳雲漳の墓には熊野市の史跡標識にあるように今も地元の人々によって香華が供えられていた。

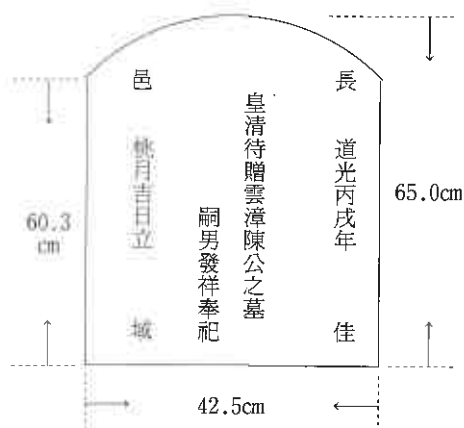


図1 陳雲漳の墓石碑文

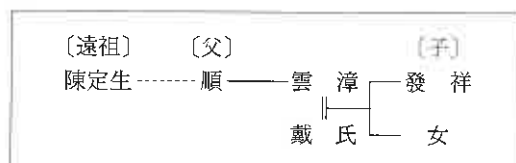


図2 陳雲漳系譜

状、歴史などについて学術的に解説されいたことに学ぶべきことが多かった。夕刻「米子国際ホテル」に着き旅装を解く。

第3日目の9月28日も早朝出発し出雲国庁跡、国府跡を見学の後「島根県立八雲立つ風土記の丘資料館」につき本間恵美子学芸主任のご案内にて館内を見学する。昭和43年10月国の庁議において決定され、土地の公有地化が図られ、47年9月9日開館された。考古資料を中心とした古文書、大刀、鏡、出雲風土記写本など3000点が系統的に展示されている。『研究紀要』『館報』等毎年発行され、当地方におけるリーダー的存在である。この敷地内にある岡田山1号墳を見学した。ここより出土した刀剣の調査で昭和58年刀身部分から「額田部臣」等の銘文が発見され話題をまいたことは記憶に新しい。続いて県指定史跡「岩屋後古墳」「山代郷正倉跡」「八重垣神社」を見学した後、玉湯町立出雲玉作資料館を見学した。規模は小さいが全国唯一の玉の専門館であり、史跡公園の東側高台にある。玉の原石の展示「めのう細工」「布志名焼」の歴史も展示されており、郷土の歴史を知る上で貴重な施設である。歴史的著名な場所においてはこのような資料館が全国に建てられることを望みたい。玉造温泉とともに「史跡と古代ロマン」

を求めて見学者が全国より来られている。玄関横に6世紀前半の築造と思われる鳥場1号墳があり石棺が見える。続いて世上を賑わせた著名な「荒神谷遺跡」を見学した。昭和59年全口の弥生時代銅剣の総発見数を上回る358本の銅剣が発見され、翌60年7m離れた場所で銅鐸6点と銅矛16本が同時に発掘された。当時の出雲の国の政治的文化的、地位の高さが推し測られる。夕刻出雲大社へ参拝し、調査の無事を祈願し、湖北道路を東へと向い松江温泉「ホテル一畑」へ投宿した。宍道湖面に夕日が美しく映えた。

第4日目は仲仙寺古墳群、史跡岩舟古墳を見学の後「足立美術館」を見学した。入館料2,300円は高いが、大観の絵、寛次郎、魯山人の陶芸品を見、雄大な自然の峰々と庭園の織りなす風情は最高である。近郊へ出向い折など一見して損はない美術館である。続いて本学資料出土地西伯郡高麗村長田地区及び高井谷村を調査し位置の確認を行なった。その後重文指定の「石馬」ある淀江町の遺跡を見学した。安江楨晃教育長をはじめ中原斉、高口勝人、(県派遣)、中山和之、岩田文章氏等のご案内にて上淀廃寺とその出土資料である壁画等を見学させていただき無事終了し米子より帰路についた。その他ご案内いただいた多くの方々にお礼申し上げます。

編集後記

第27号をお届けいたします、今回もお忙しい中ご執筆いただきました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

近年新聞、雑誌などで大学に関する記事が多くなり、また日旺など定期的に報道されている新聞も見かけます。大学における自己評価、自己点検も行なわれ受験生達もそれを参考に大学選びが始まっているともいわれています。本学も100余年の伝統を有し、多数の校友のご協力と法人の努力により、順調に充実発展してきましたが、大学の冬の時代となり、

やはり危機観もひしひしとせまっております。教職員一同智慧をしばりこの難関に対処していきます。本彙報もその意味で懸命に努力していきます。「開かれた大学」として公開講座も順調に推移しております。関係者の皆様の一層のご指導ご協力をお願いするものであります。

表紙の写真は「銅戈」であり朝鮮半島渡来といわれ、戦国時代の遺物です。青銅製の武器で刃部は尖鋭極めて実用性にとむ形式です。下図写真26.8cm。 【角田芳昭】